- TAKAHASHI -
高橋地区特別号 Vol.1

高橋支所だより

令和8年11月発行

編集・発行・問合せ
豊田市役所 地域活躍部 高橋支所　〒471-0014　豊田市東山町 2-1-1
電　話 80-0077　FAX 80-0092　E-mail takahashi-shisho@city.toyota.aichi.jp

旧今井貯木場施設が令和8年1月9日に国重要文化財に指定されました。





旧今井貯木場施設とは？

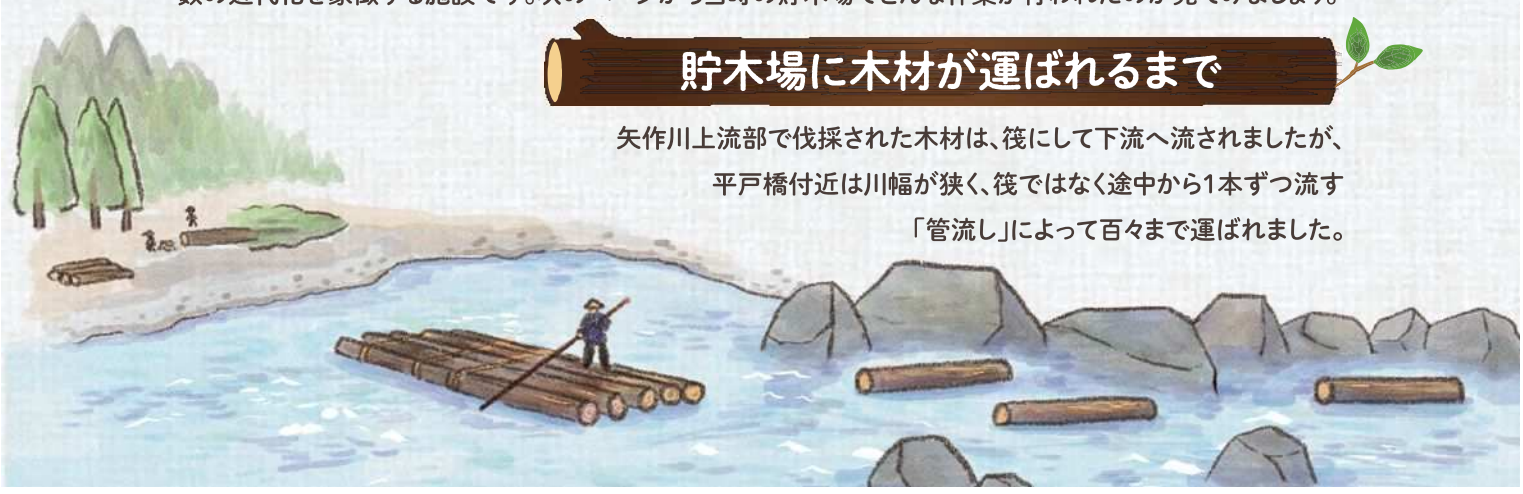
高橋地区にお住まいの皆さんにとっては、「百々貯木場」と言った方が聞きなれた名前だと思います。この度、豊田市では3件目の国重要文化財（建造物）に指定されました。また、この指定に伴い、名称が「旧今井貯木場施設」に変更されました。

旧今井貯木場施設は、豊田市百々町地内に所在する材木商の今井善六（ぜんろく）が発注し、大正7年に竣工した、河川中流域では全国で唯一現存する水中貯木場です。矢作川上流の旭地区等で伐採、下流へ流された木材の安全な保管や加工の効率化を目的に建設されました。

現在は役割を終えましたが、最盛期には数多くの木材が運び込まれ、たくさんの従業員が働く、市内でも有数の近代化を象徴する施設です。次のページから当時の貯木場でどんな作業が行われたのか見てみましょう。

貯木場に木材が運ばれるまで

矢作川上流部で伐採された木材は、筏にして下流へ流されましたが、平戸橋付近は川幅が狭く、筏ではなく途中から1本ずつ流す「管流し」によって百々まで運ばれました。



今井善六が目指した貯木場

1. 樋門(①)から木材を貯木場の中に入れる
2. 貯木池(②)の中で、種類ごとに分ける
3. レール道堤(③)で木材を製板場(④)に運び加工する
4. 加工した木材を木落壁(⑤)から貯木池に落とす
5. 木材を筏に組んで樋門(①)から出し、河口近くの平坂(西尾市)などへ流す

旧今井貯木場施設の終焉…

越戸ダムの建設によって、木材を下流へ流すことができなくなり、完成からわずか10年足らずで機能を終えることになったと推測されます。

②貯木池（ちょぼくち）

運ばれた木材と製材に加工された木材を保管しました。壁面から延びる6本の建造物は突堤と呼ばれ、木材を種類ごとに分けるために使われました。



①樋門（ひもん）

矢作川と貯木場をつなぐための門。上流から木材が運ばれ、樋門をくぐって中で保管されました。洪水の時は大きな扉で門を閉じました。





③レール道堤（レールみちつつみ）

木材を製板場へ引き上げるためのスロープです。元々はレールを設置し、木材を乗せたトロッコを機械で引っ張る計画となっていました。しかし、現地にレールを設置した痕跡がなく、牛などの動物によって引き上げる方法に変わりました。



④製板場基礎（せいばんじょうきそ）

今井家では他の材木商とは違い、製材加工を行っていました。そのため、加工の効率化を目指し、製材機器を備えた製板場所の建設を進めました。しかし、貯木場完成後、第一次世界大戦の影響を受けて木材価格が暴落、資金難となり、製板場は基礎のみで中止となりました。



⑤木落壁（もくらくへき）

加工した角材を貯木池へ滑り落とす施設です。早く運ぶだけでなく、緩衝材の木をはめる溝があり、安全性も工夫されています。



⑥平筏（ひらいかだ）

貯木池内で木材を筏に組み直し、再び樋門から矢作川の下流へ流して依頼先へ届けます。

古写真所蔵：今井家

旧今井貯木場施設のここがすごい！

1 貯木場でずっと続いた悩みを解決したい、作業もめちゃくちゃ楽にしたい

材木商の今井家にとって大きな悩み事は、洪水で木材が流されることでした。対策として川から陸に上げて固定しますが、残念ながら下流に流されることが続き、多い時では3,000本もの木材が流失したと記録されています。さらに、流出した木材は従業員総出で回収しますが、洪水のたびに探す負担は大きかったと思われます。そのため、貯木場を建設することによって、貯木池に貯めた木材は洪水で流されず、さらに樋門から直接入れることで、陸揚げが不要となり負担を軽減することを目指しました。実際に貯木場を建設中に洪水が発生しましたが、貯木池に避難させた木材は1本も流失しませんでした。今井家の悩みが解決した瞬間ではないでしょうか。

2 水に強い人造石工法は貯木場にピッタリだった


人造石工法と銘板

人造石工法とは、日本の伝統的な技法「たたき」を応用し、現在の碧南市に生まれた服部長七が開発した工法です。水への耐久性が非常に高く、明治・大正期のコンクリート工法が普及するまでの間、大規模な堤防や護岸等の工事に採用されました。貯木場は常に水を溜め、洪水にも負けない頑丈さが求められるため、旧今井貯木場施設でも採用されたのではないかと考えられます。ちなみに、人造石工法を見分ける際のポイントとして、石と石の間に「たたき」を塗るため、一般的な石垣にはない特徴的な隙間が生まれます。ぜひ現地で確認してみてください。

インタビュー

地域で長く暮らしてきた百々自治区の黒野剛司区長と、貯木場を建設した今井家17代目の今井英喜さんに、子どもの頃の思い出や、これからへの期待を伺いました。

「子どもの頃は、貯木場は特別なものというより、地域の中に当たり前にある風景でした。当時は草でジャングルのようになっており、その中でカブトムシを取ったり、秘密基地のように遊んだりしたことを、今でも懐かしく思い出します。当時は、まさかこの場所が国の重要文化財になるとは思いもしませんでした。」今回の指定については、「昔から地域にあったものの価値が改めて認められたことを、うれしく思います。これを機会に、地域の子どもたちにも貯木場の歴史を知ってもらい、自分たちのまちに誇りを持ってほしい。」と話します。「大切なのは、保存するだけでなく、地域のみんなが歴史を学び、親しめる場所にしていくこと。昔を知る人から次の世代へ、思い出や歴史を語り継いでいきたいですね。」と、今後への期待を語ってくださいました。



これからの予定

旧今井貯木場施設の国重要文化財指定に伴い、経年劣化や破損個所の修理や活用方法をまとめた保存活用計画の策定を進めていきます。また、高橋地域会議において、旧今井貯木場施設を活用した地域の活性化や市と共働による事業に関する提言がなされたことを受け、地元の方々とともに、適切な見学環境の維持活動などを検討していきたいと考えています。